

チェコ共和国における ライフサイエンス研究

チェコインベスト（ビジネス・投資開発庁）

日経バイオテク記事掲載「イノベーション立国目指すチェコ、EUと協調し研究レベルを底上げ」

7月13日発行号の日経バイオテクで、チェコの生命科学産業における研究能力についての目覚ましい成果が紹介された。本記事の著者である高橋厚妃氏は、チェコでは企業規模や研究レベルにかかわらず政府やEUの財政支援を活用できるため、日本では少数の研究機関しか保有していない先端装置が基礎研究レベルで導入されていると強調。また、低分子化合物に関するEUプロジェクトでは、大がかりな研究コストを下げインフラ整備へ注力するため、解析結果の公開や、化合物・装置・データの共有が行われていると紹介した。

生命科学分野における重要な発見と研究の生誕地

チェコには、分子遺伝学・免疫学・分析化学・薬化学・生物化学・腫瘍学・神経科学・代謝性疾患といった分野において、数多くの卓越した研究機関や大学が存在する。その多くは、チェコの科学アカデミーもしくは大学に付属した研究機関だ。1886年に遺伝の法則を発見したグレゴール・ヨハン・メンデルや、1961年にソフトコンタクトレンズを発明したオットー・ウィフテルの生誕の地であるチェコは、医薬品製造ならびに委託研究開発の拠点として注目を浴びている。

世界を変えた、HIV感染症薬のリード化合物発見

2002年、アントニン・ホリー教授は、ヌクレオチドとヌクレオシドから導出された抗ウイルス化合物を発見。うち3種類の化合物は、米国Gilead Sciencesにより、AIDS・巨細胞性網膜炎・B型肝炎の治療薬として応用された。これら医薬品は、世界中の何千という患者を救っただけでなく、研究が行われたInstitute of Organic Chemistry and Biochemistry (IOCB) へも財政源を確保するなど、さまざまな面での利益をもたらしている。

チェコ共和国における日本企業の動向

日本の大手製薬企業である大塚製薬株式会社は、2008年にチェコ企業Interpharma Prahaを買収。医

薬品の原薬製造と、日本への輸入を行う。同社のIvan Hlavacek氏は「製薬企業がチェコに工場をもつのは、能力の高い人材が豊富で人件費が比較的安いからだ」（日経バイオテク掲載記事より抜粋）と説明。このように製造拠点としての人気を集めているチェコだが、近年では外部との共同研究や協力に対する積極的な姿勢が基礎研究にはずみをつけ、医薬品のシーズ創出といった新分野でも注目を集め始めている。

チェコの生命科学研究機関、Bio Japan 2015へ出展

チェコインベストは、生命科学分野で著名なチェコの研究機関とともに、10月14日から16日の3日間にわたり開催されるアジア最大規模のバイオテクノロジー見本市「Bio Japan 2015」へ出展。チェコ政府とEU構造基金の財政支援により、BIOCEV・CEITEC・ICRC・IOCB・IMTMといった強い研究基盤をもつ研究機関が日本に集結する。出展企業へのお問い合わせ、打ち合わせの要望はtokyo@czechinvest.orgまで。

小児がん患者の写真展「My new life」を開催

Motol大学病院とチェコセンターが共催する「My new life」展覧会は、小児がん患者の生活支援を目的として開催される。壁に掲げられた独自の大型写真は、子どもたちのすばらしい信念と、未来に対するポジティブな姿勢を映し出す。チェコでは80～85%の患者が小児がんを克服しており、西欧において最も高い治癒率を達成している。本展示会は、横浜みなとみらいの「象の鼻テラス」にて9月28日から10月15日まで開催される。詳細はこちら(<http://tokyo.czechcentres.cz/>)。

お問い合わせは、チェコインベスト
（〒150-0012 東京都渋谷区広尾
2-16-14 チェコ共和国大使館内、
TEL:03-5485-8266、FAX:03-5485-
8277、Email:tokyo@czechinvest.
org、URL:www.czechinvest.org/jp）
まで。

チェコインベスト駐日代表
エリシカ・ノヴァーコヴァー

